

平成 30 年度 卒業式 式辞

みなさんの卒業、修了という節目にあたり、ご臨席を賜った田嶋徹 熊本県副知事、森浩二熊本県議会副議長をはじめ、ご来賓の方々、そして、ご家族や、みなさんの幸せを願う方々と共に、今日の日を喜びたいと思います。

私がみなさんに言葉を寄せる最後の機会ですから、日ごろ若者に伝えたいと考えていることをお話しします。平成三十一年五月一日の新天皇の即位、および、改元に向け、マスコミや評論家の間で「平成」の総括に関する議論が盛んです。俯瞰的に捉えるとき、近代化、西洋化の「明治」とその後の「大正」、富国強兵の「昭和前期」と高度経済成長の「昭和後期」に次ぐ「平成」とはどのような時代であったのでしょうか。経済的なバブルの崩壊と社会的な停滞から抜け出すべく求めた政治的安定、数々の天災や気候変動、グローバル化の反動による世界的な混乱、少子高齢化による諸課題の顕在化、インターネットや人工知能（AI）ほかのイノベーション（技術革新）に伴う生活変化、などなど。平成の時代は、一言で言えば、昭和後期の調整局面であったと考えられます。現代の成熟社会には各方面で迷走、すなわち、人心の混乱が見られます。そんな時代にこそ、曇らぬ目による人間観察を忘れてはなりません。

平成の世に生まれたスマート・フォン、つまりスマホは、パソコンの進化形として生活をより豊かで便利にすることを目指したパーソナルな端末です。システムやソフトの開発が商圈を拡大し、次々と生まれるアプリがアナクロな常識ではあり得ないサービスを易々と実現して人々の生活を大きく変えています。SNSによる情報のやりとり、各種の手続き、エンタティメントなど情報産業が飛躍的に拡大するなか、人々はスマホの世界に集中し、依存する度合いを高めています。それも悪いことではありませんが、万事がデジタル化の一方、書籍、雑誌、新聞などアナログの活字文化は衰退の気配を見せ、若者の読書時間は雀の涙ほどです。この時代、若者は何から人間社会を学べばよいのでしょうか。

人間には快適な暮らしを追い求める本能があります。人間の創造物は、しばしばこの本能から生産されます。情報化社会の到来もその一環です。しかし、気がつけば、私たちは情報の大洪水のなかにいます。私たちの身の回りには無数の情報が存在し、情報は商品にもなり、格差で損得も生じます。しかも、流行り廃りが激しい。次から次へと新たな情報がもたらされては消えていく。それが延々と続いていく。この現状に、私たちは情報との向き合い方を見定めなくてはなりません。

昔から情報は大切なものでした。いわゆる本能寺の変を察知した秀吉は情報戦の勝利者とされ、近年の世界的な経済戦争や貿易戦争でも情報合戦が繰り広げられています。情報の価値や効能は永遠のものです。しかし、私たち人間が情報に振り回されていることはないのでしょうか。画面を通して不特定多数の人たちと交流できる現代は、誰もが情報の発信者になれる時代であり、手に取れる情報の量が過去とは圧倒的に違います。情報の大洪水のなかで危険な情報や忌避すべき交流と接触する可能性も飛躍的に増大しているいま、私たちは人

として賢くなくてはなりません。この情報化の時代にこそ、人間にとって必要不可欠な、自分の心と向き合い、自分自身を理解し、制御し、他者や社会と順応する力を身につけなくてはなりません。

去年は、明治維新から百五十年であり、さまざまな振り返りがありましたが、司馬遼太郎は、明治維新を「文化大革命」と評しています。この大転換期にはクリエイティブな活動が溢れていました。例えば、明治の文学は時代を描こうとしました。文学が時代を作り上げようという意志に満ちていたと言えます。夏目漱石に「明治の精神」という言葉があるように、文学は時代と不可分でした。また、昭和の大衆歌謡曲の世界は「昭和の心」と評されたりもします。そこにも世相を映す時代精神があります。時代精神とは自分たちの社会を検証する営みでもあるのですが、平成の世に時代精神はあったのでしょうか。現代の日本は、思想なき時代にあると言ってよいでしょう。世の中の事件や事故、不祥事は、概ねモラルの劣化が原因です。感覚的な平和感と経済的な或る程度の満足感が人々の心を無為に開放してしまったのでしょうか。求道的な精神は重過ぎると嫌われ、美意識の確立も意味を持たない多様化した現代です。日常的な宗教心が強くない日本人は、明治維新の近代化がもたらした個人主義、自由主義の成熟を謳歌する現代にあって、万人の規範とすべき価値観や大切にすべき公德心を見失っているように思います。天変地異による被災が続く昨今、人の絆が救いであると理解し信じてはいますが、世の中には自分本位を象徴する事態が多発しています。世界的に見ても自分とは異質の他者を許せずに非難し、否定し、攻撃する事例が目につきます。人類にとって最も大切な、万人の幸福のための追求に向けて粘り強く生きる精神性が薄れているのではないかと思います。世の真理として、人間はテクノロジーほどには進歩しないのです。私たちは、人間が何であるか、どうあるべきかを問い続け、学び続けねばならないこと、考え続けねばならないことを自覚すべきであります。何を思考の手がかりとするか、読書なのか、あるいは、他者との会話や交流なのか、は自分次第です。

人間の内面は、喜怒哀楽や美醜、善悪などが無秩序に存在するカオス、すなわち、混沌であります。私たちはしばしば心のカオスに悩まされます。悩むことは生きている証しですが、そう割り切れないのが人生です。一方、人生とは現実です。現実といかに向き合うか、どう対応するかで生き方の選択は変わります。人それぞれの人生ですが、どんな人生を生きるにしても、心のカオスに挑む分析的な知性を大切にしたいし、磨き続けてほしい。真贋を見極める分析的な知性は人間の理解に重要であり、人間社会を考える力にもなるからです。人は人のなかでしか生きていけないのですから、人間の観察と理解は不可欠です。熊本県立大学で学んだみなさんに期待するのは、現代社会に迷走があっても、みなさんは人として幸福に生きるための道に辿り着くべく、思考の遍歴を重ねる意欲のある人間であってほしいということです。それこそは、宮沢賢治がたとえ「でくのぼう」と呼ばれても「よく見聞きし分かれし そして忘れず」「そういうものに 私はなりたい」と詩にした美しい向上心であります。美しい向上心を持ちましょう。

最後に、卒業生修了生総勢524名が夢と希望に満ちた人生を歩んでいくよう祈りつつ、

この歌を贈ります。

光満つ心のうちに燦燦と輝く夢を照らすあさひこ

「あさひこ」とは朝日、太陽のことです。みなさん、輝く太陽に愛されるような、健やかで清らかで、人に優しく誇らしい人であってください。

平成 31 年 3 月 21 日

熊本県立大学 学長 半藤英明